

堤 美智
日本大学 生物資源学部 国際地域開発学科 助教



仕事の内容とやりがい

現在、まだ1年目のため教えている科目は多くありません。主に3、4年生を対象に宗教社会学と専門外書講読、1年生のみのスタディスキルズを担当しています。学科での仕事もまだそれほど多くありません。この1年は国際地域開発学科に慣れることに時間をいただいております。学ぶことと教えることは学生と教師という立場の違いがありますが、教師として教える立場であっても、逆に学生さんの反応を見て、これでよいかの問い返し、反省をし、自らの教育の在り方を学んでいます。学ぶことと教育することはコインの表裏のような感じがします。教える立場になり、また学ぶことの重要性を再認識している昨今です。よく、教師は学生に育てられるといいますが、良い学生さんを育て、自分も育つことを目指したいと思います。



進路決定のきっかけ

特に研究者を目指したわけではありませんが、大学院で勉強するに従ってテーマをもっと掘り下げて学びたいと思うようになりました。私の周囲や両親も私がしたい課題やテーマに協力してくれました。将来の夢や目標は、あいまいな中にもそれなりに描いていますが、少しずつ実践していき、いつか大きな夢の実現に向けて歩みたいと考えています。これから落ち着いて仕事ができればと願っています。

最初に学会報告をしたのは博士2年時、世界農村社会学会です。この世界学会報告が私が研究者を目指す大きなきっかけとなりました。私の研究報告を多くの外国の専門家が聞きに来てくれ、私の研究を「とても面白い」「興味がある」「このグラフはとても良い」などと評価してくれたことがとてもうれしく、今後も研究者を目指していこうと思いました。国際学会では様々な人の発表や意見が聞けて面白く、また、新たな発見が多くあり、たいへん刺激されました。私の身近な人たちや周囲の人たちに研究者が多く、自然にこの道に来たということもあるかもしれません。



ワークライフバランス

今はまだ1年目なので大学の仕事に慣れることに重きをおき、毎日の授業や学生指導、大学の業務に従事しています。また、時間を上手にコントロールし、夏休みなど講義がない時に自分の研究をする時間を作ることができ、海外へも調査へ出かけております。毎日の生活の中では、自分の時間を週末に作ることができます。

今のところ仕事中心の生活ですが、もちろん、将来は仕事と家庭生活を両立し、ライフステージに合わせた仕事と生活のバランスを取りたいと思います。私の母も家庭生活と仕事のバランスを上手に保ちながら大学教員として37年勤務してきました。研究職だからといっていつも忙しいというわけではありませんが、やはり両親をみてきた私としては研究職を続けていく秘訣は「家族の協力」だと感じております。



未来の女性研究者へのメッセージ

まだ、研究者の道を歩み始めたばかりですから、これから広く学んでいきたいと思っています。私は高校、大学は海外で教育を受けました。大学院は日本で学び、博士の学位を取得しました。海外では生活習慣、文化、言語などが異なり、それに慣れるだけでも大変でした。異なる言語でのコミュニケーション、考え方の違いを知り、初めはカルチャーショックを受けました。しかし、今から考えると慣れることに一生懸命で、なんとか周囲になじむように努力をしました。そのことで、忍耐力、協調性、協働する力がついたのではないかと思います。このことは、様々な生きる力をつけてくれたと思います。「鉄は熱いうちに打て」という「諺」がありますが、若い学部生の間に、食欲に、自分の関心、興味があることにチャレンジすることが大切です。そのことを通して、テーマが見つかり、さまざまな研究への底力がつくのではないかと思います。



＊プロフィール
アメリカウイスコンシン州私立高校卒業→カリフォルニア州立大学卒業→東京農工大学大学院農学府博士課程前期修了→東京農工大学大学院連合農学研究科博士後期修了、博士(農学)取得→東京農工大学農学部特別研究員・早稲田大学eスクール教育コーチ→早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助手→日本大学生物資源学部・国際地域開発学科助教(現職)

中井 静子

日本大学 生物資源科学部 海洋生物資源科学科 助手



仕事の内容とやりがい

私は海に生息する貝類の研究をしてきたため、大学生や高校生、学校の先生を対象とした磯採集と無脊椎動物の観察を行う野外実習の担当をする機会が多いです。また、研究室でも海の生物を対象とした卒業研究の指導を行っています。私自身が研究の野外調査でさまざまな刺激を受けたため、多くの人に野外での生き物採集や調査を体験してもらいたいと考えています。そのためには、快適に調査を行うことも重要で、調査時の服装や調査道具、熱中症の予防などにも気を配り、楽しい思い出となるようにいつも願っています。野外調査では、参加した人とゆっくり話す時間もあり、自分の知らない生物の生態や知識を聞く機会に恵まれています。また、協力して調査をこなし、同じ経験をしたメンバー間に連帯感が生まれることが多く、人と人の距離が縮まることも魅力です。



進路決定のきっかけ

私が大学院へ進学したきっかけは、魅力ある先生との出会いにあります。私は大学院で海の貝類を材料に生物の進化や生態を研究していました。学部3年生の時に「貝の研究」をしている恩師（神奈川大学速水先生）の講義を聴講したところ、貝の話をしている先生がとても楽しそうだったのです。70歳近くの先生ですが、表情が少年のように輝いていて目がキラキラしていました。私は速水先生の研究室に入り、生物の進化や生態、生命の謎にはまだまだ解明されていないことが膨大にあることを知りました。また、その時（その後も）出会った生態学の研究者はみんな目が輝いていました。私も同じように生き物の魅力を感じたい、同じように目を輝かせた大人になりたいと思ったことが、研究者の道を選ぶ第一歩となりました。



ワークライフバランス

私は野外での生物採集や調査を行うフィールド系の研究を行っています。そのため、女性として困るのは、野外での体調不良と身の安全、重い調査道具の使用などについてです。私が学生の時は、研究室が放任主義ということもあり、自分が行う調査、研究をすべて自分でコーディネートすることができました。そのため、体調不良のときに調査をずらしたり、使用する調査道具を自分一人で持ち運べる物にしたりと、さまざまな問題やトラブルに自由に対応する事ができました。現在、私が学生と一緒に野外調査をする場合は、2～3名多くサポートの人員を準備し、1～2人が体調不良などで調査に参加できない場合への対応を可能にしています。女性の私が教員としていて、女子学生の野外調査や研究活動への不安を少しでも和らげることができればと思います。



未来の女性研究者へのメッセージ

残念ながら、大学・大学院時代の私の周りには、年上の女性研究者や女性教員がいまませんでした。しかし、魅力ある男性教員や男性研究者が自分にはロールモデルとなっており、自分の将来的な目標を与えてくれました。研究の世界は、ある意味男女平等であり、国籍や年齢による差別も少ないかもしれません。なぜなら、論文の著者名は国が違えば男性か女性か名前からの判別は難しく、年齢もわからないからです。女性だからという理由で、研究者となる道へ不安を抱くことはありません。女性故にぶつかる問題もあるかもしれませんが、それを理解し支援してくれる得難い人たちとの出会いの場でもあります。少しでも研究の道に興味をいだいたら、ぜひ一歩を踏み出して下さい。男性研究者も女性研究者も、みんなあなたのチャレンジを心待ちにしています。



*プロフィール

栃木県立宇都宮女子高等学校卒業→神奈川大学理学部応用生物科学科卒業→東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命科学専攻博士前期課程修了、修士(生命科学)およびドイツツェン大学との共同プロジェクト参加(ドイツ留学)→同博士後期課程修了、博士(生命科学)→東北大学大学院生命科学研究科博士研究員→山形大学理学部生物学科研究支援者および東北大学大学院生命科学研究科科目等履修生、MEd (Professional Ecosystem Manager) 取得→日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科助手→現職

難波 亜紀

日本学術振興会特別研究員(JPSP)・
日本大学生物資源科学部獣医学科



仕事の内容とやりがい

水産の増養殖産業に貢献することを目指し、魚の病気を予防する研究に取り組んでいます。研究といってもベンチワークだけではなく、魚の飼育試験や養殖現場における調査など体力が必要な仕事も行っています。飼育試験などが始まると休日もなく、魚中心の生活になります。そして実験に応じてサンプリングを行い、後はひたすら解析の日々です。微生物学、遺伝子工学、病理組織学などあらゆる分野の手段を使い解明していきます。その果てしない解析の中から一筋の結果が見えた時、全ての事が報われる気がします。また、開発した予防法が現場に普及されるようになったときの充実感は、かけがえのないものとなっています。



進路決定のきっかけ

4年次に卒業研究に取り組んだ際、一つ一つ紐をほどいていくようなおもしろさを感じ、研究に携わりたいと考えるようになりました。研究者を目指すきっかけは、大学院修士課程修了時、博士課程に進むか企業に就職するか迷っている時に、偶然大学に張ってあったポスターに「これからは女性研究者の時代!」と書いてあるのをみて背中を押された気になり、研究者の道に進もうと決めました。



ワークライフバランス

まさに、試行錯誤中です!

現在、3歳と1歳の子供がおり、かわいい盛りですが手もかかります。保育園から連絡がくることも多く、以前のように1日中、研究に集中して取り組むことは難しいのですが、研究室の先生方や学生の協力を頂きながら、子供を寝かせてから大学へ戻って実験をしたり、子供が起きるまでの早朝にデスクワークをこなすことで、やりくりをしています。ただ予定外がたくさん起こるのも子育てです。以前、共同研究者と実験をする予定だったのが準備に手間取り、保育園へのお迎え時間が迫ってきしまったため、翌日に延長してもらって帰宅したところ、翌朝子供が発熱し、更に翌々日に伸ばしてもらったことなどもありました。1度だけならともかく、2度・3度となると、多くの方に迷惑をかけかねないため、事前準備・状況説明・早めの取り組みを以前より厳しく自分に課すようにしています。

なお、日曜日は、唯一子供達と1日中過ごせる日なので、思いっきり子供達と遊んでいます。子供の成長を感じるとともに、頭がリセットされ、1週間また頑張ろうと気合も入ります。大事なものは、頭の切り替えと、「なんとかなるさ」というポジティブ思考でしょうか。



未来の女性研究者へのメッセージ

大学の女性研究職の歴史は浅く、残念ながら子供がいる研究者にとって十分なサポート制度が整っているとはいえません。だからと言って、日々の積み重ねが大事な研究を出産や子育てを理由に休むわけにはいきません。ポジティブかつ柔軟な気持ちで物事に取り組み、理解ある環境(家族、上司、仲間、所属機関)を獲得し、継続することが大切です。まずは、ポジティブに続けていきましょう。



*プロフィール

日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科卒業→日本大学大学院生物資源科学研究科生物資源生産科学専攻博士前期課程修了、修士(生物資源科学)→同博士後期課程修了、博士(生物資源科学)→(独)水産総合研究センター中央水産研究所研究等支援職員→日本大学モロ(ポストドクトラルフェロー)→結婚→第1子出産→復帰→第2子出産→復帰→日本学術振興会特別研究員(JPSP)→現職

好きか嫌いか、自分がどのように生きたいか

平野 貴子

日本大学 生物資源科学部 生命化学科 助手



仕事の内容とやりがい

大学教員は研究を行いつつ学生教育にも関わります。研究内容は、企業の研究機関では方針に沿った研究に従事することになると思いますが、大学ではその分野であれば自分の希望するものに挑戦できます。一方で、研究活動と教育活動の両立は大変であることも事実です。学生時代やポストは、とにかく実験を行い研究を進めていけば良かったのですが、今はそういう訳にも行きません。現在私は「助手」という立場ですので、自分を中心となって講義を行うことはありませんが、演習科目や実験を分担したり研究室で学生の指導をしています。自分の都合だけで実験を進めることはできなくなりました。しかし、学生と一緒に実験結果について考察し次の手順を決めていくことも研究活動の一環です。研究室でのディスカッションの時間は大切に楽しんでいます。



進路決定のきっかけ

全て自分が好きか嫌いかで決めてきました。高校時代は理系科目に興味はありましたが成績が良い訳ではなく、一年間受験浪人しました。浪人中に生物と化学の両方を学べる分野に興味を持ち、農芸化学科に進学しました。入学できて幸せだったので、大学院進学も視野に入れて学部時代はほとんど勉強がしませんでした。博士課程進学の際には、修了しても職がないなど、悲観的な情報も頭に入れた上で、博士進学後にどのような可能性があるかおおまかに頭の中でシュミレーションしました。たとえば希望が叶わなくても後悔しないと心に決めて進学を決めました。時代とともに職種も変化していくものですので、思い描く通りにはならないものだと思ひ、あまり構えずに進路を選択したように思います。



ワークライフバランス

健康管理には気をつけて過度に無理をしないようにしているつもりですが、元々、世間一般で言う「ワークライフバランス」を取りにくい職種だと思います。それは、決して職場の環境が整っていないと言う訳ではなく、アカデミック・ポストの場合は研究と教育を両方成立させる必要があるからです。学生という相手が常にいる仕事ですし、生き物を対象とした研究をしている場合にはさらに自分の都合を中心とした生活はしにくくなります。私の場合は特にバランスを取ろうと意識してはいません。しかし、今後必要が生じたら家族とも相談してなんとかバランスを取っていくことになると思います。



未来の女性研究者へのメッセージ

現在、大学教員を目指すのであれば博士の学位が必要です。いくら好きなこととはいえ、朝から晩まで夏休みも冬休みもほとんどなく研究室に通い、将来のことを憂いながら結果を出していく生活に耐えなければなりません。博士課程は例外を除き最低3年間です。学費もかかるし年齢も上がるため、学生の期間を延長する訳にもいきません。これを乗り切るためには精神力と体力が必要です。博士の就職も厳しいです。私は縁があつて現在の職に就きましたが、大学教員や研究所の研究員は始めから終身雇用ではありませんし、一生懸命研究成果を出し続けることになります。「研究に関わりたい」のであれば修士、学士でも道はあります。他の人がこうだったからとあまりとらわれずに、就業形態や結婚を含め、自分がどのように生きたいか考えていくのが良いと思います。



*プロフィール

聖園女学院高等学校卒業→大学受験浪人→日本大学生物資源科学部・農芸化学科(現・生命化学科)卒業→日本大学大学院生物資源科学研究科・生物資源利用科学専攻博士前期課程→修士(生物資源科学)→同専攻博士後期課程(この間、COMFプロジェクト学生研究員、学部大型研究リサーチアシスタント)→博士(生物資源科学)→日本大学ポスト・ドクトラルフェロー→現職

福澤 めぐみ

日本大学生物資源科学部 動物資源科学科 助教



仕事の内容とやりがい

私の仕事は教育と研究です。教育では、学生さんに自分の研究テーマ（イヌの行動や学習）に関心を持ってもらえたらと期待しながら、講義や実験実習、卒業研究を指導しています。現在の研究は、主にイヌの学習やヒトとの生活におけるイヌのストレス等を行動学的ならびに生理学的に評価することを目的にしています。私たち人間にとって、非常に身近な存在になったコンパニオンアニマル（伴侶動物）ですが、彼らと一緒に生活をするなかで私たちが知っておかなければならないことはたくさんあります。また、研究室では保護したイヌたちの訓練や里親探しも行なっています。研究室の学生さんやイヌたちに囲まれて、とてもやりがいのある楽しい仕事です。



進路決定のきっかけ

所属した研究室でイヌの言語認知について行動学的に評価・研究を行い、イヌの訓練技術につながる研究を続けたいと思うようになりました。その後留学したイギリスの大学院では、研究課題だけでなく、動物の問題行動カウンセリングについて勉強する機会に恵まれました。帰国後も大学院に在籍しながら、講義のサポートや研究と並行して警察犬や家庭犬訓練の技術を学びました。ほとんどプライベートな時間はありませんでした。これまでの走り続けた日々の結果が今の進路につながったと思います。



ワークライフバランス

客観的にみると、恐ろしいほどにバランスがとれていないと思います。研究室で管理している犬たちも家族同然ですので、ほぼ年中無休で研究室か飼育棟にいます。しかし、家族のサポートなしに今の生活は成り立たないので、家族にはとても感謝しています。家庭も仕事も犬が中心ですが、もう少し家庭の時間を増やしていけたらと思っています。



未来の女性研究者へのメッセージ

学生のときは、興味のあることにチャレンジし続けることが大切だと思います。夢を叶えるために遠回りしても、それがいつしか自分の糧になっていることに気づけるときがきます。あれもこれもと欲張りすぎると疲れてしまっていますが、自分のモチベーションが維持される状態を自分で見極め、努力し続けると結果はついてくると思います。



*プロフィール

高校卒業→麻布大学獣医学部動物応用科学科卒業→同大学獣医学研究科動物応用科学専攻博士前期課程修了→修士(応用動物科学)→De Montfort University, Faculty of Applied Sciences, Master of Science修了→MScis (Animal Cognition)→麻布大学獣医学研究科動物応用科学専攻博士後期課程修了→博士(学術)→ヤマザキ動物専門学校非常勤講師→ドッグスクール(家庭犬のしつけ・問題行動修正、警察犬育成)主宰→ヤマザキ動物看護短期大学(現・ヤマザキ学園大学)非常勤講師→日本大学生物資源科学部 助手→現職

●
お茶の水女子大学 生命情報学教育研究センター
特任講師
細野(深尾)友美



仕事の内容とやりがい

お茶の水女子大学生命情報学教育研究センターのスタッフとして新しい大学院教育に携わる一方、同大学食物栄養学科食品化学研究室に籍を置き、直属の大学院生と一緒に食と生活習慣病について研究しています。講義や基礎の学生実験もあり忙しい日々を送っていますが、真面目で心優しい学生達と頼れる先生に囲まれ、楽しくやりがいを感じながら過ごしています。学生たちは卒業までの時間が限られており、私から教えられることは本当に少ないので、自分で問題解決できるための力を付けてあげられたらと思っています。この仕事の楽しみに、日本全国・世界各国の先生との交流があります。学会などの機会に地域で評判のお店で美味しいものを食べながら、研究のこと、プライベートのこと、何でも楽しく話せる輪が広がります。



進路決定のきっかけ

幼い頃から科学に興味がありましたが、研究職は想像していませんでした。タイトルのように、好きな科目・得意な科目は「理科と国語」。中学の先生には「両方を活かせる仕事はない」と言われ、「理科」を選んだ末に研究職に就きましたが、これが幸いでした。レポートでも、論文でも、アウトリーチ活動でも、文章を読んだり書いたりする機会が想像以上に多かったのです。国語が好きな自分の強みが活かされていると感じます。

大学では授業や実験で楽しく過ごし、卒業を控えた時に高校の恩師に会う機会がありました。恩師は教員を勤めながら博士課程で学んでおり、大学での研究のこと、学位を取得することについて魅力あるお話を聞かせてくれました。このことは、大学で研究を続けたいと思うきっかけのひとつになりました。



ワークライフバランス

不思議なことに、女性研究者の夫の50%以上が研究者で、生物系に絞ると70%を超えるそうです。実際、友人にも研究者夫婦は何組もいて、これを知った時には大変驚きました。そして研究者夫婦に共通の悩みが、パートナーの勤務地です。パートナーの赴任の都合で転職したり、離れ離れに暮らすなど苦勞をした人が少なくありません。キャリアの上で無視できない問題で各々が工夫を凝らしていますが、私の場合は周囲の方々に助けられ仕事を続けることができています。

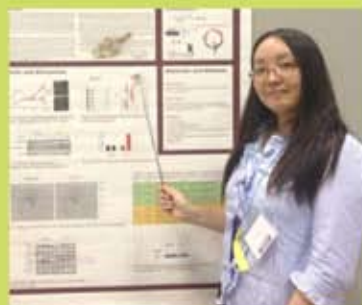
現在は通勤時間が長いので、電車の中で論文を読んだり実験計画を立てたりして、職場での時間を最大限に利用できるように心がけています。家事のほとんどは夫と協力して週末に済ませますが、忙しい平日は家事支援系の家電(食器洗い乾燥機、お掃除ロボット)を便利に使っています。



未来の女性研究者へのメッセージ

現在の職場ではたくさんのロールモデルに出会います。就職後にステップアップの必要を感じて学位を取得しに来た女性、育児が一段落し学び直しにきた女性、同世代の男性より明らかにアクティブな女性の先生。出産育児などで低空飛行が一時的にあったとしても、長い目で見て活躍できるのが女性です。もし研究職に興味があるなら、気負わずに先輩に話を聞いて回るのも良いでしょう。

女性にとって大切なことは、priority(優先順位)を見失わないことです。今では男女限りませんが、進学・就職・結婚・出産育児・介護などの各ライフステージでは厳しい決断を迫られる時があります。変わりやすい環境に柔軟に対応できるスキルを磨き上げ、自分の人生や生活で“大切なもの”を日頃から意識し、迫られた選択に最良の判断を下せるよう祈っています。



*プロフィール

愛知教育大学附属高校卒業→日本大学生物資源科学部農芸化学科(現・生命化学科)卒業→日本大学大学院生物資源科学研究科応用生命科学専攻博士前期課程修了、修士(生物資源科学)→同博士後期課程修了、博士(生物資源科学)この間、日本学術振興会特別研究員CO、日本学術振興会特別研究員DC→結婚→国立長寿医療センター研究所にて博士研究員として医学研究に携わる→お茶の水女子大学にて助教を経て現職

なぜだかやめられなかった野生動物

三谷 奈保

日本大学生物資源科学部生物環境工学科助教



仕事の内容とやりがい

野生動物の保護管理、保全あるいは外来種対策に関する調査研究をしています。野外での調査も研究室でする実験もあります。山で調査をしていると、時々、私の存在に気づかず、人間を意識していない野生動物の姿や行動を見られることがあります。そんな時はワクワクします。また、調査をしていると地元の方々と知り合いになって、一緒にご飯を食べながら、地域の暮らしや動物の話を教えてもらうことがあります。たまたま、地元の方しか知らない場所や遊びに連れて行ってもらったりするのも楽しいです。そして、「調査結果が野生動物の保全や対策に役に立った」と思えたとき、やりがいを感じます。



進路決定のきっかけ

8歳の時、日本初の動物園の女性獣医師である増井光子さんをモデルにした「どうぶつえんのおいしゃさん」という絵本を読んで獣医になると決めました。獣医大に進んだのですが、在学中に野生動物の野外調査や観察をするサークルで活動するうちに、山で暮らすのが野生動物の本当の姿だと思うようになりました。そして、野生動物と共存するには、動物の行動や生態を知らなければならないし、さらに動物だけではなく生態系や人の暮らしも一緒に考える必要があると気づきました。そこで、大学院では生態学あるいは人と生態系の関わりについて学ぶことができる専攻を選び、シカやツシマヤマネコの研究をしました。



ワークライフバランス

「いつまでも山に行かれるように体に悪そうなインスタント食品や外の食事は食べません」というのはカッコ良すぎで、実際は食べることに興味がありすぎる食いしん坊です。スパイスから作るインドカレーや、大根もち、ハモス（中近東の豆のペースト）など、非日常的な料理を作ることが気分転換です。家で作れると思っていた料理のレシピを知ると、手品の種あかしを見たような感じがします。日常的に料理を作るための工夫としては、通勤時間を短くしています。また、仕事以外でしたいことは早起きして朝することにしてしています。夜にしようと思っていると、仕事が長引いてできなくなることがありますが、朝やっておけば、一日中、後悔しないので。



未来の女性研究者へのメッセージ

野生動物の専門家として就職するのは今もかつても狭き門です。学生の頃、将来の目標にするのは躊躇われ、「とりあえず、野生動物に関わっていられる間は頑張ろう」と決めました。でも、その「とりあえず」の時間が積み重なるうちに運良く就職することができ、調査研究や保護活動、管理や対策に関する会議の運営や計画策定など様々な仕事に恵まれました。逆に、冷静に状況を分析してキャリアプランニングしていたとしたら、「自分には野生動物は無理」と判断して諦めていたかもしれません。自分の将来に役立つと思うことを、与えられた環境でできる最大限の努力と工夫でやってみてください。先が見えなくても頑張っていて続けると、ある日、思いもよらない道が開けることがあります。



*プロフィール

千葉県立千葉女子高校卒業→日本獣医学大学獣医学部獣医学科(現・日本獣医学大学)卒業→東京大学大学院農学生命科学科林学専攻修士課程修了(農学)→動物病院勤務(財)自然環境研究センター(在職中)対馬野生生物保護センターに出向、また、社会人入学で九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻博士課程修了博士(理学)→現職

●
宮沢(加藤)雅子
国立国際医療研究センター研究所
感染症制御研究部 研究員



仕事の内容とやりがい

私は、結核の研究に携わっています。付属の病院で分離された菌株の保管から、動物実験や分子疫学解析まで、多様な実験・研究に関わることができることに仕事のやりがいを感じています。結核は「過去の病気」と考えられがちですが、現在も世界の約1/3の人々が感染している感染症です。日本においても結核罹患率は西欧の先進国に比べてまだまだ高く、中蔓延国となっています。ホスト（ヒト）の遺伝子多型による結核感受性や生活環境など、感染から発症までのメカニズムについて未だに明らかにされていない部分が多くあります。私たち研究部の結核研究班は、結核のコントロールに貢献できるような成果を目標に日々研究を行っています。



進路決定のきっかけ

女性だからこそ手に職を持ちたい、と思って大学受験の時に獣医学科を受験しました。大学卒業後、獣医師として地方公務員になり、家畜や食肉の病気の検査・診断・予防を行う業務に就きました。その時に、動物が罹っている疾病をルーティーン業務以外にもっと調べたいと思ったことが、研究職を目指そうとしたきっかけです。当時の職場の上司にも大学院進学についてアドバイス頂き、背中を押してもらったように憶えています。大学院に進学して、研究という視点から獣医学分野をみることができ、私の中で獣医学のおもしろさが大きくなったように思います。院修了後、獣医師資格と学位を有する求人を募集していた今の職場に就きました。



ワークライフバランス

仕事からプライベートへの頭の切り替えが上手く出来ずにいるので、まだまだ模索中です。特に趣味がないため、平日は海外ドラマの視聴と近所の飲食店に行くことが私の主なリフレッシュ方法になっています。そのほかには、猫、植物、メダカに癒しを得ています。休日は時間が合えば異業種の知人・友人たちと積極的に遊ぶようにしています。楽しいだけでなく、違うアイデアをもらったり自分の立ち位置を客観視できる大切な時間です。夫には毎日の仕事の話を聞いてもらっていて、とても助けられています。平日に仕事に集中するためにも、休日に家で仕事をしないことが今の課題です。



未来の女性研究者へのメッセージ

どんな職業もそうだと思いますが、職場で最も求められる能力は、きっとコミュニケーション力なのだと思います。研究と言うと、こつこつ一人でやる仕事というイメージがあるかもしれませんが、ディスカッションやプレゼンを経て研究成果はまとめられます。ジェンダーで物を言うのは良くないかもしれませんが、研究という分野において（も）女性達のコミュニケーション能力は大きな強みだと思います。あとは、パソコンに詳しくあったり英語ができたりすると重宝がられます（必須かもしれませんが）。力仕事が多く細かい作業が求められるせいか、研究に関連する職場では女性の比率が高いと思います。「研究者になりたい、興味がある」ならば是非夢の実現のために頑張ってください。



＊プロフィール
関東学院高等学校 卒業→日本大学生物資源科学部 獣医学科 卒業→新潟県食肉衛生検査所（地方公務員）→神奈川県家畜保健衛生所（地方公務員）→日本大学大学院生物資源科学研究科 獣医学専攻 博士課程修了→国立国際医療研究センター研究所感染症制御研究部 研究員→結婚→現職

● 聖代橋 史佳
神奈川県農業技術センター 生産環境部
品質機能研究課 技師



仕事の内容とやりがい

私は県の職員として、神奈川県農業技術センターで働いています。農業職の仕事は、行政、研究、普及、教育と多岐にわたっており、どれも県の農業を支えるとても魅力的な仕事です。現在、私は研究に配属されており、県内で作られる農作物や新品種の機能性を調べたり、バイオテクノロジー的な手法を使った研究を行っています。まだ、新人でわからないこともたくさんありますが、周りの先輩は知識や経験の豊富な方々ばかりで、ちょっとした日常会話も勉強の場になっています。また、私の場合は大学で行っていた研究と近い分野で仕事をしているので、学生時代に勉強したことを直接活かすことのできる環境にあります。大学で学んだことを使って、自分の生まれ育った地元を応援できる仕事にとってもやりがいを感じています。



進路決定のきっかけ

中学・高校では単純に生物の授業が好きで、大学を決める際は自然に植物資源科学科を選択しました。大学3年生の時に果樹・蔬菜園芸学研究室に入り、果実の成熟に関する研究をしていました。そこで研究の楽しさを知り、もっと突き詰めたいという思いから、大学院の修士課程に進学しました。研究職に興味を持ち始めたのもちょうどそのころです。

神奈川県という農業のイメージはあまり無いかもしれませんが、土地生産性が高いという他県にはない特徴があります。学生時代に現在の職場である神奈川県農業技術センターを見学したのがとても印象残っており、農業系の職場が少ないなかで、大学で学んだことを活かすことができ、しかも研究職に就ける可能性のある神奈川県を受験することに決めました。



ワークライフバランス

通勤時間が長いので平日は体力勝負ですが、土日はしっかり休めるので助かっています。最近ではどちらか1日は外に出掛け、あとの1日は家でんびり過ごすことが多いです。周りの先輩職員は音楽やスポーツなど仕事以外に趣味を持っている方がほとんどです。私も旅行が好きですが、長期休暇などをうまく使えば、海外旅行に行くこともできます。

独身のため、仕事と生活のバランスは今のところ特に意識していません。先輩の女性職員は既婚や未婚、さらにお子さんがある、いないに関わらず、それぞれのライフスタイルに合わせて仕事をしており、女性の働きやすい職場だと思います。



未来の女性研究者へのメッセージ

公務員と言うと、敷居が高いように感じるかもしれませんが、努力が反映されやすいのも公務員採用試験だと思います。私の場合、農学の専門試験はまず過去問を解いて出題傾向を把握し、さらにその周辺を徹底的に勉強して対策を行っていました。植物資源科学科の先生には公務員試験を意識した講義をされている方もおり、受験勉強の際には学生時代のノートがとても役立ちました。

地方公務員の場合、必ずしも研究に配属されなかったり、異動で研究から離れてしまうことがあるかもしれません。けれど、自分が何を目指してやってきたかをきちんと伝えられれば、研究に携われるチャンスは必ずあります。



＊プロフィール
日本大学櫻丘高等学校卒業→日本大学生物資源科学部植物資源科学科卒業→日本大学大学院生物資源科学研究所生物資源生産科学専攻博士前期課程修了→名古屋大学大学院生命農学研究科生物機構機能科学専攻博士後期課程中退→民間の化粧品会社で研究→神奈川県に農業職として入庁

山崎 朗子
国立医薬品食品衛生研究所 衛生微生物部 研究官



仕事の内容とやりがい

食品衛生に関わる仕事をしています。国内で起こった食中毒事例の中でも深刻なものや原因不明なもの、前例のない新種が発見された時には、国立感染症研究所や各地方衛生研究所、独立行政法人研究機関、大学などと協力して、原因究明や調査研究を進めます。必要であれば検査法を改定したり新たに構築したりもします。近年で扱ったものでは、焼き肉チェーン店でのユッケ被害や、生レバー関連の事例などでしょうか。国全体に関わる案件を扱うことが多いので責任も大きくなりますが、同時に大きなやりがいを感じられる仕事でもあると思います。



進路決定のきっかけ

高校生の頃、世間で話題となったのがエボラ出血熱でした。その原因がサルから感染するウイルスであることを知り、「サルはどうして体内にウイルスを保持しながら健康でいられるのだろう。」と疑問を持ちました。ヒトもウイルスと共生できれば薬剤もワクチンも必要なく、健康でいられるのではないかと。その疑問から人獣共通感染症に興味を持ち、臨床より研究をしたいのなら医学部より獣医か薬学という助言から、獣医学科に進学しました。4年次からは人獣共通感染症を卒研題材とし、博士課程ではマラリアの疫学研究を行って現在に至ります。研究者になることが目標だったわけでもなく、研究しかしたくないと思ったわけでもなく、流れに乗ったまま辿り着いたら現職だった、というのが正直なところでした。



ワークライフバランス

基本的には暦通りの勤務ですが、食中毒事例などはこちらの予定に関係なく発生するので、そういう時には原因究明が急がれるため、休日出勤になることもあります。年末、年度末など、各種の報告書提出期限が迫る時期も場合によっては残業・休日出勤を余儀なくされることもありますが、フレックス制度もあるので調節可能です。研究員は各自で担当の研究を進めているので、個人個人の都合で休みを取ることが可能です。産休、育休についても多くの職員が取得して復職していますし、勤務時間をずらして保育園の時間に合わせて仕事をする職員もいます。



未来の女性研究者へのメッセージ

研究職というと、定職の不安がつきものだと思います。残念ながら実際に正規雇用の研究職は数少なく、ほとんどが有期であるのが現状です。ですが少なくとも近年は女性の雇用を増やす動きが強く、各研究機関でも性別に関係なく採用が行われています。研究職の採用は不定期であるため、就職活動が難しいこともありますが、この職に限ってはひとつの縁とタイミングだと言えらると思います。一所に就職したら最後まで、ではなく、場所を変えながら様々な知識とテクニックを吸収して幅を広げ、色々な分野に適応できる人材に成長していくのも研究者という職業の面白いところだと思います。今、興味がある何かがあるなら、のめり込んでみてはいかがでしょうか。何事もきちんと仕事すれば、意外と道が開けるものです。



＊プロフィール
神奈川県私立横浜国立大学附属高等学校卒業→日本大学生物資源科学部獣医学科卒業→長崎大学熱帯医学研究所・新興感染症病態制御学系専攻博士課程修了、博士(医学)→現職

吉田 啓子
鎌倉女子大学教授 (家政学部学部長)



仕事の内容とやりがい

大学では、研究と教育を担う両面を持っています。あっという間の25年が過ぎ、現在は学部長として、家政保健学科と管理栄養学科の2学科のマネージメントを行いつつ、食品衛生学の授業や実験、ゼミや卒論も担当しています。市民講座等を通じて一般の消費者への情報提供も行っています。女子大であり、家政系の学部であることを活かし、女性の視点と消費者の視点から、食の安全性に目を向けた実学的研究を行っています。一般人と専門家の認識の隔たりも感じます。少しでも多くの疑問や不安を解決するべく、身近な食の安全に関するデータを蓄積し、橋渡しをしたいと思っています。これからの社会には、科学的思考と判断力を持った女性が必要です。未来の女性の育成と、生活者感覚での研究を並行できるのは醍醐味かもしれません。



進路決定のきっかけ

家庭に入るか仕事に専念するかという時代で、女性のできる仕事も限られていましたので、選択の余地はほとんどなかったと思います。どのような形でも研究は続けたいと思い、「その時にできる最大限を活用して、工夫する」として今日まで生きてきました。研究室の恩師である春田三佐夫先生ならびに人生の師でもある森地敏樹先生には「研究の面白さ」と「仕事は120%の完璧」、「心は豊かに広く」を教えていただきました。また、女性研究者として尊敬するのは、大学院時代のドイツ留学中にお世話になったDr. G. Shurenです。女性らしい細やかさや可愛らしさを持ちつつも、研究に対する情熱と責任感ある仕事ぶりは、女性リーダーとしての模範になっています。



ワークライフバランス

人生一度きりですから、人として、女性として出来る限りすべてを欲張って生きてみたいと思っています。大学院の3年目に結婚しました。研究分野も仕事場も異なり、結婚当初から夫は単身赴任で、毎週末には帰ってきます。「ダブルバーチャン・システム」と呼んでいます。子育ても、生活も、同居する夫の母の支援、時には実家の母の支援もあってこそ可能でした。家族の理解と支えがあって今日まで過ごしてきたと思います。家に帰れば家庭に専念、大学に来れば仕事に専念と、否応なしに切り替えができることが、バランスを取る秘訣かもしれませんね。24時間勤務で、その時々は大変と思っても、過ぎてしまえば何とかなってきたなと思います。



未来の女性研究者へのメッセージ

私も決して強い女性ではありません。日々悩み泥臭く生きています。かつては、育児休暇もなく、夏休み中に出産して復帰、子どもを背負いながらクリーンベンチで培養実験、学会には子連れで皆さんに迷惑をかけながらも参加など、女性であることが大きな壁にもなりました。しかしやりたい気持ちが強ければ、道は開けて行きますし、道がなければ自分で開拓すればよいと思います。自分らしく生きてみませんか？「なんとかなるさ」がモットーです。これからは、女性が活躍する場もチャンスもたくさんあります。私にできることは、微力ではありますが、これからの女性に応援をおくり続けることかと思っています。困った時には、誰かが助けてくれるものです。気負いすぎず、一人で悩まず、周りの人に声をかけてみるといういいですね。



＊プロフィール
愛知県立千種高校卒業→日本大学農獣医学部食品工学科(現・生物資源科学部食品生命科学科)卒業→日本大学大学院農学研究科博士前期課程修了(農学修士)→同博士後期課程修了(結婚)→ドイツ酪農科学研究所留学→博士後期課程修了(農学博士)→第1子出産→渡米(夫の仕事で半年)→帰国、主婦(1年ブランク)→鎌倉女子大学講師→第2子出産→同大学助教授→同大学教授→家政保健学科長→現職

若林素子

日本大学生物資源科学部 食品ビジネス学科 准教授



仕事の内容とやりがい

教育と研究に取り組んでいます。授業は「調理学」「食物学実験」などを担当しています。研究は「おいしさ」を科学的に明らかにすることを大きなテーマに、特に食品のフレーバー分析や香り成分の酵素的生合成について、香り成分の立体構造と香気特性の関連などについて調べています。この春他大学から本学に異動し、大学の校風や学生のカラーの違いなどを面白く発見しつつ、先生方や学生さんたちとの新たな出会いにワクワクしています。自らの知恵や努力で新しい事実を見出す喜びを、学生さんたちにも感じてもらえるよう、努めたいと思っています。



進路決定のきっかけ

高校の生物教員だった父の影響で、幼いころから将来は白衣を着て仕事をすると思い込んでいました。具体的な進路を考えた高校生のころは医学部薬学部と理学部生物か家政学部食物かで迷いました。高校理系クラスで少数女子の立場が弱かったことが影響して女子大に行こうと決め、食いしん坊だったこともあり、食物を選びました。当初から研究者志望でしたので修士進学は迷わず、その後は経済的に自立すべく大学助手の道を選びました。助手は任期制で、4年間勤める間に自分は教育者には向いていないと思うようになり、ちょうど任期が切れる時期に東京都の食品研究員募集がありましたので受験して異動しました。公務員研究者として生きていくのだろうと思っていたのですが、人生には想定外のことがいろいろと起こるもので、結果的に今大学教員として働かせていただいています。



大学助手時代に共同研究者として知り合った夫は今も食品企業の研究者です。子供に恵まれなかったので、お互いに平日はワーク一辺倒です。その分休日は家事全般を行う必要があります。夫も手伝ってくれます。ミュンヘン工科大学では一つのテーマに夫婦で取り組み、ワークとライフの区別が全くなかった2年間を過ごしました。研究成果も出て、このままずっと続けたいと思ったものです。帰国後はその頃のような共同実験は難しい状況にありますが、論文執筆を一緒に行ったりしています。夫には公私ともに助けられていて本当に感謝しています。



未来の女性研究者へのメッセージ

学生時代には、いろいろな種類の悩みや迷いがあるだろうと思います。そんな時に、「今」の目の前のことだけを考えるのではなく、1年あるいは2年後に「自分がこうあっていたい」という姿を想像してみることをお勧めします。想像できれば、それを実現するために、今何をしなければならないかが自然に決まってくるのではないのでしょうか。大学には、目指すべき素敵な先生方がたくさんいらっしゃいます。できるだけ多くの先生方のアドバイスを聞いてみるのもよい方法だと思います。いろいろな意見を聞いたうえで、最終的に自分で決断すること。人生は一度きりで、自分の人生の責任を取るのには自分しかいないのですから。是非素晴らしい女性研究者になってください！

*プロフィール

愛媛県公立高校卒業・お茶の水女子大学家政学部・食物学科卒業・同大学院家政学研究家食物学専攻修了・同学部同学科助手・東京都研究員・ドイツミッソン・工科大学客員研究員・私立短大食物栄養専攻准教授・私立大学管理栄養学科准教授（在職中）お茶の水女子大学博士後期課程にて博士（理学）・現職

渡辺 千晶
琉球大学 医学研究科
人体解剖学講座ポスドク研究員



仕事の内容とやりがい

私は現在、ヒトの可視形質の遺伝要因を探索する研究に携わっています。我々ヒトの“見た目”は様々です。顔立ちの違いはもちろんの事、歯が大きい人や小さい人、手の指が長い人や短い人等々、挙げていくときりがありません。この違いはどこからきているのでしょうか？一卵性双生児では瓜二つの外見をしていることから、ヒトの外見には遺伝による影響が強いことがうかがえます。我々は、ヒトの“見た目”の違いを生み出している遺伝的な要因を探索しています。

どの分野においてもそうですが、研究の醍醐味はやはり未知のことを知る、ということだと思います。その際のワクワク感は何ものにも代え難いものです。



進路決定のきっかけ

大学進学の際は、楽しそう、という漠然とした思いから理系を選択し、小さい頃の夢だった獣医学科を受験しました。もともと医療よりも動物の生態に興味があり、卒業後臨床には進まないかもしれない、と漠然と思っていました。

大学入学後、四年次で研究室に配属され、各自テーマを与えられて研究を行うことになりました。初めて研究というものに触れ、未知の事を知る愉しさに魅了されました。博士の就職難は知っており、企業への就職活動も行いましたが、もう少し研究をやりたい、という気持ちから大学院博士課程に進学することを決めました。

大学院卒業後は、折角獣医師免許を取得したのだから、と臨床も経験しましたが、結局研究畑に戻り現在に至ります。



ワークライフバランス

結婚後、仕事と家庭を両立するには（両立出来ているかは不明ですが）、夫の理解と協力が不可欠であったと思います。結婚したばかりの頃は、帰日も遅くなりがちで海外出張や休日出勤、と家庭の事は二の次でした。夫も研究者であったことで理解が得られやすかったのかなと思います。

しかし、子供ができて状況が一変しました。妊娠中は、突然の出血で入院し、仕事を休まなければならないことも。産後は完全に子供中心の生活で、自分のこともまなりません。産後二か月で復職しましたが、お互いの実家が遠方であるため、夫の出張の際などは親に飛行機で来てもらい、手伝ってもらっている状況です。お互いの両親が元気であること、私の職場に子育てに対する理解があること、また夫の職場に生後二か月から入所可能な保育所が併設されていることで助かっています。



未来の女性研究者へのメッセージ

自分の興味や疑問を突き詰め、知る愉しさを味わえる素晴らしい職業であると同時に、安定した職を得るのが難しく、精神的に辛いという面もあります。お給料もあまり望めませんし、博士号は“足の裏の米粒”（とらないと気になるが、とっても食えない）と言われるくらいです。私自身も進路決定の際は非常に迷いましたが、研究者がおかれている状況を知った上で、その分野にチャレンジするのであれば、結果がどうであれ納得できるのではないかと思います。自分が好きな仕事とむいている仕事は別かもしれません。しかし、やってみなければわかりません。社会に出る際、失敗を恐れてチャレンジしないのは勿体ないという気がします。ぜひ悔いが残らないような選択をして下さい。



＊プロフィール
私立横浜共立学園 卒業→日本大学生物資源科学部獣医学科卒業→総合研究大学院大学 先端科学研究科 生命体科学専攻 博士後期課程修了博士（理学）→動物病院等で勤務→結婚→動物衛生研究所にて特別研究員 鳥インフルエンザの研究に携わる→現職→第1子出産→復職